

「形容詞+and+形容詞」の語法

Two Adjectives Connected by a Coordinate Conjunction 'and'

倉田 達 Tatsu Kurata

等位接続詞andで2箇の形容詞を連結し、一方の形容詞が副詞的機能となり、「副詞+形容詞」の意味を形成することがある。

His eyes were *sharp and merry*.—J.Steinbeck,—*The Grapes of Wrath*

(彼の目は鋭く愉快げだった)

*sharp and merry*の*sharp*は次の形容詞*merry*の程度を現わし愉快さの際立ったことを意味し、視覚を通しての主観判断となっている。

The stars were *clear and sharp* over his head.—*Ibid.*

(彼の頭上の星は、鋭く澄んで光っていた)

*sharp*は輪郭に関する明瞭性の度合を現わし、次の形容詞*clear*にかかる副詞となっていて、それは視覚を通しての主観的印象の強力性を意味している。

They fell into silence, and the dark came and the stars were *sharp and white*.—*Ibid.*

(彼等は、だまりこむと暗くなり、星は鋭く白かった)

*sharp and white*の*sharp*は*white*の程度を現わし、夜空に於ける星の鮮明度を示し、主観的印象力を意味している。

Aggie's lean face and yellow hair showed in the lamplight, and her nose was *long and sharp* in the shadow of her head on the wall.—*Ibid.*

(Aggieのやせ顔と黄色の髪の毛は、ランプの明かりで照らし出され、壁に映った頭の影となって、彼女の鼻はひどく長かった)

*sharp*は著しい特長を表わし、主観的衝撃感情の意味を有している。

The music snarled out 'Chicken Reel,' shrill and clear, fiddle skirling, harmonicas *nasal and sharp*, and the guitars booming on the bass strings.—*Ibid.*

(音楽が「Chicken Reel」を鋭くはがらかに奏ではじめた。バイオリンは音色を出し、ハーモニカは鋭く鼻にかかって、ギターは低音で音を出していた。)

*sharp*は聴覚による主観的聴覚判断反応として表現上副詞となり*nasal*にかかる。

The dusk passed into dark and the desert stars came out in the soft sky, stars *stabbing and sharp*, with few points and rays to them, and the sky was velvet.—*Ibid.*

(夕暮は夜の闇へと移ってゆき、砂漠の星がやわらかに空にあらわれ、空を照らす明りや光線もなく、星は鋭くつきさすようにきらめき、空は一面暗かった。)

*sharp*は星の光り具合が鋭い意味で感覚受容反応であり、*stabbing*にかかる副詞となっている。

You can mould the music with curved hands, making it wail and cry like bagpipes, making it full and round like an organ, making it as *sharp and bitter* as the reed pipes of the hills.—*Ibid.*

(手をまげれば音楽を作り出すことができるのだ。風笛のように悲しく泣き叫ぶことも、オルガンのように充実した円満な音も、丘のあし笛のように鋭く痛痛しい音も出すことができる。)

sharp は心に響いて特定感情の惹起を促す音の強力性を意味し、機能的には副詞となり bitterにかかり、sharp and bitterは経験に基づく聴覚反応の再生となっている。

sharp and…あるいは…and sharpは視覚・聴覚反応としての客体の程度を示し、副詞として他方の形容詞を修飾している。

“You were very *nice and helpful* then. Will you be *nice and helpful* again?”

—W.S. Maugham, *The Razor's Edge*

(あの時すばらしくお力添えをして下さいました。もう一度していただけるかしら)

nice and helpfulはこの場合口語用法であり、niceは手伝ってくれたことへの反応としての満足感を含む感動を示している。

;and then looking round to see that everything was *clean and nice*.—Id., *The Moon & Sixpence*

(改めて可成きれいに片付いたかどうか、周辺を見回した)

cleanは片付け後の客観状況を示し、niceはそれが主観的判断として満足できる程度になっているかどうかという意味である。

‘Them cars might be a purty place to stay,’ said Ma. ‘*Nice an’ dry*. You think they’s enough brush to hide in, Tom?’—J. Steinbeck, *The Grapes of Wrath*

(「あの貨車は住みいいかもしれないね」と母は言った。「良く乾いててね、Tomおまえかくれている藪があるかね」)

nice an’ dryは「乾き具合が良い」意味であり、niceは主観的判断反応を示す方言用法である。

nice and…あるいは…and niceは人間の相互関係・視覚・感覚による主観反応としての満足の度合すなわち精神的充足感を表わしている。

The smell of the cooking beans was *strong and fine*.—J. Steinbeck, *The Grapes of Wrath*

(煮える豆の臭いは、すばらしく強かった)

fineは臭覚による主観判断となっている。

The day was *fine and sunny*, and I felt in myself a more acute delight in life.

—W.S. Maugham, *The Moon & Sixpence*

(その日は美しく晴れた日だった。私は自身で人生の一層のすばらしい喜びを感じていた)

fineはsunnyに対する感動的感情の意味を有しfine andは副詞としてsunnyにかかる。

His hair was *blue-white and fine*.—J. Steinbeck, *The Grapes of Wrath*

(彼の髪はすばらしく青白かった。)

blue-whiteは青と白との混合色であり、fineはその混合色の主観的感觉効果の度合をしめしている。

But when the day came the weather, which had been *fine and warm*, broke;

—W.S. Maugham, *The Razor's Edge*

(ところが、その日になると、それまで晴れて暑かった天気がくずれてしまった)

When I had been in Paris about a fortnight I was sitting one evening at the Dôme and since the terrace was crowded I had been forced to take a table in the front row. It was *fine and warm*. -Ibid.

(私がParisに約2週間程いた時、ある晩、Dôme喫茶店に腰をおろしていた、するとテラスは人がたくさん集ってきたので、やむを得ず、前列のテーブルについていた。その晩は晴れて暖かかった。)

*fine*は天候状態、*warm*はそれに附随した気温に対する判断反応であり、*fine and*は副詞として*warm*にかかることになる。

*fine and*は視覚・臭覚・感覚による反応を表わしているが、この語法は使用率は比較的高く、細江逸記著『デュー・エリオット作品に用いられたる英国中部地方言の研究』p.453に若干の適例が揚げられている。

...and when he was drunk there was no holding him, I would be *black and blue* all over for days at a time. -W.S. Maugham, *The Moon & Sixpence*

(彼が酒でも飲んだ日は、どうにも手のつけようがない。私など、よく何日も身体中青黒くなってしまうことがありましたわ。)

He was a fat little man with a brown round face and he wore a thick tweed suit of *black and green* check and a clerical collar. -Id., *The Razor's Edge*

(彼は鳶色の丸顔をした肥った小男で、黒緑の格子縞の厚手のスコッチの服を着て、牧師のカラーをつけていた。)

She wore the striped *blue-and-white* jersey of the French sailor, a pair of bright red slacks and sandals through which protruded the painted nails of her big toes. -Ibid.

(彼女は縞模様のあるフランス水兵の着る青白の毛糸のシャツを着、ピカピカの赤いスラックスとサンダルをはき、そこからは大きな足指の染めたつまめが突き出ている。)

その他色彩関係では、a poisonous-looking mixture of *red and white* ice-cream -Id., *Liza of Lambeth* (紅白混合の毒入りに見えるアイスクリーム) のように色彩に関する形容詞を接続詞andで連結する場合、混合色であることを示しているが、両形容詞間のしさいの具合は、表現上では必ずしも明白ではない。

He wore silver bound eyeglasses, and his eyes, through the thick lens, were *weak and red*, ... -J. Steinbeck, *The Grapes of Wrath*

(彼は銀ぶちのめがねをかけ、厚いレンズを通して見る彼の目は薄赤かった。)

*weak*は主観判断としての*red*の程度を表わしている。

I remembered how vividly green her eyes had looked, but now they were *pale and grey*. -W.S. Maugham, *The Razor's Edge*

(彼女の目は、どんなにいきいきと緑に見えたかは憶えているが、今ではその目も色あせて灰色になっていた)

*pale*は次の形容詞*grey*の判断反応としての状況を表わしている。

The truck moved along the beautiful roads, past orchards where the peaches were beginning to colour, past vineyards with the clusters *pale and green*,

under lines of walnut trees whose branches spread half across the road. -J. Steinbeck, *The Grapes of Wrath*

(トラックは、桃が色づきはじめている果樹園をすぎ、薄緑の房のついた葡萄園をすぎ、枝が道に半分程かざしかけているくるみ並木のつづく美しい道路に沿って走った。) pale and greenは「薄緑」の意味でpaleはgreenの度合を示す判断となっている。

Her hair was dripping and combed, and her skin was bright and pink. -*Ibid.*
(彼女の髪は、濡れとかされていたし、皮膚はつやつやのピンク色をしていた。)

The mist lifted from the hilltops and they were *clear and brown*, with black -purple creases. -*Ibid.*

(霧は岡の頂きからあがって、その頂きは黒紫のひだでくっきりと褐色となっていた。) cleanはbrownの状況判断となっている。

She was still watching his slight figure when Ma came back, *clean and pink*, her hair combed and wet, and gathered in a knot. -*Ibid.*

(彼女は彼のやせたうしろ姿をながめていると、母親の記憶が戻ってきた。きれいな色つやになり、髪は濡らし櫛でとかし、きちんとたばねてあった。)

以上のように色彩形容詞と共に用いられたweak, pale, bright, clear, cleanには判断としての反応部分がよく表われている。

色彩による深い感動として

The vineyards, the orchards, the great flat valley, *green and beautiful*, the trees set in rows, ... -*Ibid.*

(葡萄園、果樹園、大きな平たい溪谷、美しい緑で、木々を列並びにして植えてあり…)

beautifulは緑を見て「美しい」と感動する情緒作用を表わす部分を形成している。そして視覚による主観反応であることを意味している。

The world is *hard and cruel*. -W.S. Maugham, *The Moon & Sixpence*
(世の中とは冷酷なもんだよ)

Huston's eyes grew *hard and cruel*. -J. Steinbeck, *The Grapes of Wrath*
(Hustonの目はけわしくすごくなった)

いずれもhardは次の形容詞cruelの程度を表わし、主観的感情判断としての痛烈性を意味している。

"It was *hard and anxious* work at first, and we worked strenuously, both of us. -W.S. Maugham, *The Moon & Sixpence*

(「最初は大変気苦労の多い仕事でしたよ。私たち夫婦は身を粉にして働きました。)

hardは記憶再生による経験反応を示し、副詞として次のanxiousにかかる。

hardは経験・視覚を通してのかこくな情的判断を表わしている。

There is an atmosphere that is at once *intense and tragic*. -W.S. Maugham, *The Moon & Sixpence*

(ただちに強烈に悲愴となる雰囲気がある。)

直観としての痛撃線を含む情的判断としての意味を有し、intense andは副詞としてtragicにかかる。

He face was brown with sun, and her eyes were *black and intense*.

—J.Steinbeck, *The Grapes of Wrath*

(彼女の顔は日焼けしていて、目は眞黒だった)

このintenseは視覚を通しての前にくる形容詞の極地を示す判断となっている。

I received the impression of a life *intense and brutal, savage, multi-coloured, and vivacious*.—W.S.Maugham, *The Moon & Sixpence*

(私は受けた印象では、ひどく動物的で、野蛮で、多彩で、精気のある生活ということでした)

intense andは副詞としてbrutal,savage,multi-coloured,vivaciousそれぞれの形容詞にかかり、各形容詞のもつ性質の極地を指している主観的反応部分を形成している。

The full green hills are *round and soft* as breasts.—J.Steinbeck, *The Grapes of Wrath*

(緑一杯の丘は、胸みたいに丸くソフトな感じである。)

softは丘の丸味を見ての主観的感覚判断であり、as breastsは連想としての比喩部分を形作っている。

And the pears grow *yellow and soft*.—*Ibid.*

(梨の実は黄色くやわらかになる)

softは経験にもとづく体験反応となっている。

上記2例の形容詞の配列順序は、因果関係の順となっている。

The people were *intent and excited*.—J.Steinbeck, *The Grapes of Wrath*

(人々は張りきって、のぼせていた。)

intent andはexcitedにかかる副詞と解してよいであろう。

They came near to the platform and then stood quietly waiting, their faces *bright and intent* under the light.—*Ibid.*

(彼等はプラットホームの近くに来て、静かに立って待っていたが、顔は、あかりの下で、熱意がこもってあかるかった。)

intentは主観的推理を表わしている。

In a few moments a blonde girl walked near ; she was *pretty and sharp-featured*.—J.Steinbeck, *The Grapes of Wrath*

(すこしたつと、金髪の娘が歩み寄って来た。その女の子は、美しく細そりしていた。)

prettyは主観的感覚反応で、pretty andは副詞としてsharp-featuredを修飾する。

Lake Leman, on fine days so *trim and pretty*, artificial like a piece of water in a French garden, in this tempestuous weather was as secret and as menacing as the sea.—W.S.Maugham, *Ashenden*

(晴れた日には、フランス庭園の水溜りのように、美しく整然としていわゆる人工的にみえるLeman湖は、嵐の日には、海のように神秘的になり脅威的でもあった。)

prettyは主観的状景判断を示している。

And this is *easy and efficient*.—J.Steinbeck, *The Grapes of Wrath*

(このことは容易に能率のあがるものです。)

easyは他方の形容詞efficientの意味の結果が出てくる途中段階での進行状況に対する体験反応を示し、easy andはeasilyの意に解してよいであろう。

And hunger did not skulk about, but the world was *soft and easy*, and a man could reach the place he started for. - *Ibid.*

(飢えはなくなり、世界は容易になごやかになり、男は彼の目標とした場所に行き着くことができる。)

easyは前例と同じように、結果としてsoftとなる途中の経過状況に対する経験に基づく主観的判定を意味している。

The emotions common to most of us simply did not exist in him, and it was as absurd to blame him for not feeling them as for blaming the tiger because he is *fierce and cruel*. - W.S. Maugham, *The Moon & Sixpence*

(大抵の人間が普通に持っている感情は、彼には全くなかった。それがないからとて彼を責めるのは、虎がねいもう残忍だからというので虎を責めるのと同じく不合理なことだ。)

虎という動物本来の行動性格としてcruelのみでは不充分であり、極度の状況下のcruelという程度を表わす語fierceを加えてはじめて本来の性質を示し得るというfierceは主観判断となっている。fierce andは副詞fiercelyとなりcruelを修飾する。

Male and female voices had been one tone, but now in the middle of a response one woman's voice went up in a wailing cry, *wild and fierce*, like the cry of a beast. - J. Steinbeck, *The Grapes of Wrath*

(男女の声が一本調子になっていた。が今應える声の中から、一婦人の声が、すごく荒々しい泣き声となって声が高まった。それは獣の呼び声のようであった。)

wild and fierceには普通の荒々しさに加えて残酷・残忍性が感じとれるという意味があり、fierceは主観的聴覚反応であることを表わしている。

この語法「形容詞+and+形容詞」は多種にわたり行われていて、

The dawn was coming, but it was *slow and pale*. - J. Steinbeck, *The Grapes of Wrath*

(夜が明けかけていたが、それにしてもゆっくりと薄明るくなった。)

slow andは副詞となり、次の形容詞paleにかかり速度を表わし、slowは視覚を通しての反応判断となっている。

...Tahiti is *smiling and friendly*; it is like a lovely woman graciously prodigal of her charm and beauty; - W.S. Maugham, *The Moon & Sixpence*
(Tahitiは親しげににっこりほほえんでいる。それはたとえば、美的魅力を愛想よくふりまく美しい女である)

smiling and friendlyはfriendly smilingとみてよい。

friendlyは内面描寫、smilingは表情を表わし両者は表情と内心の関係を示し、friendlyはsmilingから受ける感情反応となっている。friendlyを副詞的に用いた特殊用法である。

"If he comes here, I shall go," said Mrs. Stroeve violently. "I don't recognise you. You're so *good and kind*." - *Ibid.*

(「あの人来るのなら、私行きますわ」とStroeve夫人は、はげしく言った。「いつものお前とは違った人間みたいだね。あなたはとても心やさしい女なんだがな」)

good andはcolloquialで副詞的²⁾に次の形容詞kindにかかると同時に、intensiveとしての経験反応を示している。

I liked his brush work, it was *bold and dashing*, and he had a rich vivid palette.”-Ibid., *The Razor’s Edge*

(わたしはあの人の筆使いが好きだったわ。それは思いきり威勢がよくてね。それに彼の絵具板は豊富で、さえていましたのよ。)

女性の発話であることに注意する必要があるであろう。boldは筆の運びに対する主観反応となっている。

She looked at Pa for a moment, and her eyes were *wide and staring*, like a sleepwalker’s eyes.-J.Steinbeck, *The Grapes Wrath*

(彼女は父親の方をちょっと見たが、夢遊病者見たいに目を大きくあけてじろじろみていた) wide andを副詞的に用いた次の形容詞staringを限定する。

She wore the same grey dress that she wore so often, *neat and becoming*, -W.S.Maugham, *The Moon & Sixpence*

(彼女は着付けの同じねずみ色の衣服を身につけたが、きちんとよく似合った)

neat andは副詞として次の形容詞にかかる。

Muley’s face was smooth and unwrinkled, but it wore truculent look of a bad child’s, the mouth held tight *and small*, the little eyes half scowling, half petulant.-J.Steinbeck, *The Grapes of Wrath*

(Muleyの顔はしわ一つなくなめらかだったが、ただけしいいたづらっこの容ぼうをしていた。すなわち口元をきりっとしめて小さくして、小さな目は半分にらみつけるようであり、なかば怒っているようだった。)

tightは視覚による反応判断であり、tight andで副詞となっている。

Ol’folks died off an’little fell as come an’we was always one thing-we was the fambly-kinda *whole and clear*.-Ibid.

(年老いた人たちが死んでゆくと、小さなものが育った。そしてわたしたちは、いつも一つだったわたしたちは家族だった一つにまとまりぴったりしていた)

標準的な表現からは大分かけ離れ、くづれた言葉となっているが、whode andを副詞に用いている。

The character of a scoundrel, *logical and complete*, has a fascination for his creator which is an outrage to law and order.-W.S.Maugham, *The Moon & Sixpence*

(論理的に完璧である悪人というのは、法と秩序の攪乱につながるにせよ、創造主にとっては、一つの魅力となるものである。)

logical and completeは「論理的に完璧な」の意味で、logicalは刺戟思考completeに対する直観反応判断作用として、その適用範囲(制限)を表わし、表現上は副詞として形容詞completeを限定することになる。

When a man becomes *pure and perfect* the influence of his character spreads so that they who seek truth are naturally drawn to him.-Id., *The Razor’s Edge*

(人は完全に純粹になりきると、その人の人格の影響力は拡がってゆき、眞理を求める人達は自然とその人にひかれるようになりますよ。)

colloquialな表現として用いられていて、perfectはpureの度合を表わしている。

Our life is *simple and innocent*.—Id., *The Moon & Sixpence*

(わたしたちの生活は、やましさを悪事を考えない単純さなのです。)

innocentはsimpleの内容についての思考判断で、表現上では、simpleを限定することになる。

..., and a mammoth lady, bit of hock and buttock, bit of breast, muscled like a dray-horse, *powerful and sure*.—J.Steinbeck, *The Grapes of Wrath*

(…足も腰も大きく、胸も大きく、間違いなく強そうな馬車馬みたいに筋肉隆々のマンモスのような大女)

sureは客観に対する主観的確信の度合、すなわち断言を意味し、副詞としてpowerfulにかかる。

The days that had passed since I left Wellington seemed *extraordinary and unusual*.—W.S.Maugham, *The Moon & Sixpence*

(Wellingtonを発ってから、いくにちもの間、余りにも異常のように思えた。)

extraordinary andはextraordinarilyと解してよいであろう。それは一方の形容詞unusualの極端なことを意味し、主観反応判断となっている。

A wind, *gentle and sighing*, blew in puffs from the south-east, and the mountains on both sides of the great vally were indistinct in a pearly mist.—J.Steinbeck, *The Grapes of Wrath*

(風は、一かたまり、しづかに音をたてて、西南から吹いてきた。大きな谷の両側にそびえる山山は、眞珠色の霧に包まれてぼやけていた。)

gentleは判断作用を意味し、gentle andは副詞と解してよいであろう。

She looked up at Tom and smiled a little at him, but her eyes were *serious and tired*.—*Ibid.*

(彼女はTomを見上げ、ちょっと微笑したが、彼の目はひどく疲れていた。)

seriousはtiredに対する程度判断を表わし、intensifyingな使い方である。

「形容詞+and+形容詞」は換言すると、主観と客観の並列語法であり、意味上はintensifyingとして「副詞+形容詞」と同一となる。

Though looking younger he was now seventy and as usual with men of that age there were days when he felt *tired and ill*.—W.S.Maugham, *The Razor's Edge*

(若く見えはするが、彼は今70才で、その年の人の常で、ひどく疲れを感じずる日があった。)

tired and illは「ひどく疲れる」意味である。前例と似たintensifyingな用法である。

Her footsteps were *loud and careless* on the leaves as she went through the brush.—J.Steinbeck, *The Grapes of Wrath*

(茂みを通り抜ける時にも、落葉を無頓着に踏みつけて、足音がひびいていた。)

carelessは音を通しての聴覚反応判断となっている。

It was *bleak and cold* when I got there and a thin rain was falling.—W.S.Maugham, *The Razor's Edge*

(私がそこについた時、冷え冷えとした寒さで、小雨が降ってましたよ。)

bleakは寒さの程度を意味するintensifyingな用法で口語として用いられている例である。

I was *excited and interested*.—Id., *The Moon & Sixpence*

(私は興奮して興味をそそられた。)

excitedは主観的な感動を意味し、excited andは副詞と解してよいであろう。

She sniffed voluptuously. “Sweet and acrid, and you know they’re smoking in their rooms, and it gives you a nice homely feeling. –Id., *The Razor’s Edge*

(彼女は官能的に鼻をひくひくさせた。「ぴりっとした甘さね。知ってるでしょう、部屋の中で吸ってるのよ。それとても落着きたい気分になるのよ。)

acridは味覚反応による強さを示し、sweetにかかる。口語の女性による表現であることに注意すべきであろう。

「形容詞+and+形容詞」の型は一時的な現象を表わしていることが多い。

「形容詞+and+形容詞」から少々複雑な型に発展した例として、

The carriage was full of people *eating and drinking and talking* and the heat was terrific. –*Ibid.*

(車内には人があふれ、飲み食いしながら話をしていた。暑さはすごかった。)

口語表現の例である。eating and drinking and talkingは「飲み食いしながら話をしている」意味を表わし、eating and drinking andはtalkingにかかる。

You’re their ideal of all that’s *graceful and beautiful and wonderful*. –*Ibid.*

(すばらしく品の良いことや、美しいことについては、あなたは、みんなお子さんたちの理想になっているのですよ。)

wonderfulは副詞的に用いられ、gracefulと他の一箇の形容詞beautifulの双方にかかる。wonderfully graceful and beautifulと同義となる。wonderfulは視覚を通しての感動を伴う主観判断として他の2箇の形容詞に対するintensifyingな用法となっている。口語表現であることに注意しなければならない。

“Do you like her dress? I chose it for her myself.”

“It’s *pretty and* it’s *suitable*. –*Ibid.*

「彼女は服気に入りましたか。私が選んであげたの。」

「まことにうるわしく、良くお似合いですわ。」

“It’s *pretty and* it’s *suitable*. は It’s *pretty and suitable*. と同意味と解してよいであろう。したがってpretty andは副詞でsuitableにかかることとみてよい。

女性による口語表現である。

「andを含む並列形容詞」の表現では、一方の形容詞が他方の形容詞の程度・範囲・限定を意味している。それらを意味する形容詞は、機能上副詞的に解せられ、他方の形容詞に従属すると考えられる。その場合の形容詞は、視覚を中心として聴覚・味覚・臭覚のような感覚刺激としての客観受容にたいする主観的感觉反応あるいは判断となっていることが多い。すなわちこの語法は、視覚・聴覚の他に味覚・臭覚等の刺激による感情・感覚反応及び思考刺激による判断反応についての相関関係を現わす並列語法であると言うことができる。情緒表現として広く用いられているが、その他広範囲にわたり使われている。故に概括的には、客観に対する主観反応という両者を包括した連結表現である。換言すると「形容詞+and+形容詞」は、「主観的解釈」(主観的感觉反応あるいは判断) + 「客観叙述」を意味し、具体的には、自然及び客観としての人間生活と、それらに対する人間の主観的感じ方、あるいは思考に於いては、刺

載としての性質に対する主観的直観による判断作用についての表現、いわゆる客観としての性質・性状と受容としての反応関係を現わす主観・客観について接続詞andを用いた並列形容詞表現法となっている。形容詞を並列させて「副詞+形容詞」の型を採らないことは、結果としては、主観部分を重視した伝達法、いわゆる主観的反応の印象強化という主観的感じ方に中心を置く、意味上主観重点主義のintensifyingな表現形成法となっている。主観部分を形成する形容詞は、反応としての情動・情感・感動・判断描寫の形容詞となり、叙情的あるいは思考判断表現を形成する。この形容詞は性質・性状に対する反応を示す故に、形式的にはこの反応は客体に対して従属的となり、この語法は、主従関係の形容詞相互に関する重言法的な特殊語法となっている。

2個の形容詞間の関係に於いて、一方の形容詞が解釈上副詞化が可能となることは既述の諸例が如実に示している。

O.E.D.はShakespeareから2例を、更にA.Schmidtは9例³⁾ 掲げていることは、Shakespeareがこの表現型の種類を可成多く駆使して現代口語英語表現形成への貢献としての表現の豊富さと精密性を示している。

一方の形容詞と副詞化しないで、形容詞を副詞の代用として使用することについて、歴史的には簡言すると古い表現の名残ということになる。すなわち colloquial language 殊に illiterateの language, adverb of degree 更に colloquial languageの intensiveの adverb としては副詞の代りに形容詞が用いられることの多いことは指摘されている。⁴⁾ この「形容詞+and+形容詞」型もその影響を受け「副詞+形容詞」とならないで、口語・方言・俗語に於いては今日までその形が残っている。

使用の回数を重ね慣用化の方向をたどるよりも、使用度数も割合低く、この型の語法の多種多岐におよんでいることは、個々のそれぞれの表現自体よりも、寧ろ語法形成法としての原理が重視され、嗜好されていることの現われであって、結果的には主観的感情あるいは判断に重きを置く表現方法として、口語・方言を中心に俗語の方面にも浸透していることを示している。

20世紀の散文英語は、口語化の影響著しいいわゆる口語散文体となっている。それ故、この語法も、しばしば使用されていて、この方面への浸透のみられることは、既述の数多くの諸例がそれを明らかにしている。

Level fields became lakes, *broad and grey*, and the rain whipped up the surfaces. -J. Steinbeck, *The Grapes of Wrath*

(河と同じ高さの平らな畑は、一面に灰色の湖となっても、雨はなおも水面に降りそいでいた。)

*broad and grey*の *broad*には、いつもと異なる冠水の広がり「驚き」の感情を混じえた *intensifying*な用法となっている。

He so dragged his rake that the tine marks were *straight and deep*. -*Ibid.*

(彼は熊手を引っぱったので、その跡が真すぐに深くついていた。)

*straight and deep*の *straight*には、「予想外」という感情を交えた *intensive*的用法となっている。

His face was *drawn and tired*. -*Ibid.*

(彼の顔はやつれて疲れていた。)

*drawn and tired*は「やつれて疲れてる」意味で、*drawn and*は副詞として *tired*にかか

り、tiredの程度を示している。

Uncle John's eyes were *tired and sad*.—*Ibid.*

(John伯父の目は悲しげに疲れていた)

sadは視覚を通しての感覚反応で、and sadは副詞でtiredにかかるのみでよい。

“But it's not only because he's a genius that I ask you to let me bring him here ; it's because he's a human being, and he is *ill and poor*.”—W.S.

Maugham, *The Moon & Sixpence*

(「もっとも僕がつれてくるというのは、あの男が天才だからというだけでない。あの男も人間です、不運にも貧困で苦しんでいる。それだからなのだ。」)

口語表現として用いられいて、ill and poorは「ひどく貧しい」くらいの意味で、ill andは副詞としてpoorにかかり、程度を表わしている。

The schooners moored to the quay are *trim and neat*, the little town along the bay is white and urbane, and...—*Ibid.*

(波止場に碇泊したスクーターはきちんと並んできれいであり、湾岸の小さな町は白光って優雅でもあるし…)

trim andは意味上neatにかかる副詞のみでよいであろう。trim and neatは「きちんと並んできれい」の意ある。

以上は両形容詞間の意味上の関連性の主従関係、換言すると両形容詞語彙の意味間の関連性は、いわゆる包入的なきわめて明瞭な場合である。然しそれ程明確でない場合もある。

Then the wind dropped, and the sea was *calm and blue*.—W.S. Maugham, *The Moon & Sixpence*

(それから風はやみ、海は静かで青かった。)

calm and blueに於いて、この場合風が吹いている時との対比で述べられているので、印象上はcalmの方が中心になっているとみてよいであろう。

There were bits of old brocade on the walls, and the piano was covered with a piece of silk, *beautiful and tarnished*.—*Ibid.*

(壁には古い綿の布片がかかっていて、ピアノには光沢を失ってもなお美しい絹の布がかぶってあった。)

beautiful and tarnishedでは「光沢は失っていても全体印象として美しい」ということでbeautifulの方に重点は置かれている。

They were glad enough to make a fuss of me when I could entertain them, but now I'm *old and sick* they have no use for me.—*Id.*, *The Razor's Edge*

(私が彼等をもてなしてた頃、連中悦んで私のこと大騒ぎしたが、今老いの病いの身となると、彼等には私は不要なのです。)

口語表現であり、old and sickでは話者はsickの方をより強く感じとっているとみてよいであろう。

Suddenly a man walking past me, stopped and with a grin that displayed a set of very white teeth said : “Hello!” I looked at him blankly. He was *tall and thin*.—*Ibid.*

(突如1人の男が私のところを通りすぎては立ちどまって、眞白に並んだ歯をむき出しに

して、にやっと笑って、「やあー」と言った。私はぼんやりと相手を眺めた。彼は背が高くやせていた。)

tall and thinでは、相手を見た直感としてどちらかというthinの方を話者は強く感じとっているとみてよいであろう。

His nose was *long and thin*, and curved like a bird's beak, and his nostrils were blocked with light brown hair. -J. Steinbeck, *The Grapes of Wrath*

(彼の鼻は細長く、鳥の嘴みたいに曲がっていて、鼻の穴には薄い赤毛が生いていた。)

この表現のlong and thinでは、話者はlongの方を強い印象力として受けとめている。

"But of course your hands are your most fascinating feature. They're so *slim and so elegant*." -W.S. Maugham, *The Razor's Edge*

(「ですが、いうまでもなくあなたの手は、最も魅力的特長ですね。その手はとてもほっそりして品が良いですよ。」)

口語表現として用いられていて、slimは強い印象を現わし、elegantはそれを限定する形となっている。

His appearance was *wild and uncouth*; -Id., *The Moon & Sixpence*

(彼の外見は野人そのままの無骨さだった)

wild and uncouthに於いてuncouthの方が意味が広くそれをwildは限定している。

; and her eyes had remained *young and vivacious*. -Ibid.

(彼女の目は若い頃そのままにいきいきしていた)

young and vivaciousは「生き生きとした若さ」の意味で、youngの方が形容詞としての意味は広くvivaciousがこれを限定している。

The Aryans when they first came down into India saw that the world we know is but an appearance of the world we know not; but they welcomed it as *gracious and beautiful*; -Id., *The Razor's Edge*

(Aryan人は初めてインドに来た時、自分たちの知る世界は、知らない世界のほんの現われとみたのですが、それを品良く美しい世界と受けとめたのです。)

口語表現の中で用いられてるgracious and beautifulでは、beautifulの方が意味広く中心的で、より狭い意味のgraciousはこれを限定している。

'Dead and bloody. -J. Steinbeck, *The Grapes of Wrath*

(「血だらけで死んでね。」)

両形容詞の意味の範囲を比較すると、bloodyの方が狭く、したがってdeadにかかるのみでよい。すなわちand bloodyは副詞的となりdeadを修飾し「血だらけになって死んで」の意味となる。このdead and bloodyは目撃した事実の記述であり思考は含まれていない。

次に比較的複雑な例として

I had admired the way in which the actors had contrived to be *human, passionate and true* within the limitations that confined them. -W.S.

Maugham, *The Razor's Edge*

(俳優たちが、自分の課せられた制約の中で情熱的に真実の人間になろうとして工夫してきたその演技方に感歎していた。)

human, passionate and trueの3箇の形容詞ではhumanが最も意味範囲広く、他の2形容詞はより狭く、したがってpassionate and trueは副詞的となりhumanを限定する。

...the complexion was *nice, clear and white*, with a delicate tint of red on the

cheeks, and...-Id., *Liza of Lambeth*

(膚色はすばらしくすんだ白色で、頬は薄赤かった)

nice, clear and whiteに於いては、niceとclearの両形容詞は「白い膚色」を目撃しての主観的判断を示し、したがってwhiteより意味範囲も狭く、nice, clear and は副詞的にwhiteにかかることになる。

「形容詞+and+形容詞」型の語法に於いて

(1)形容詞としての刺戟内容に対する主観的反応、あるいは判断の表現としての形容詞は一般に刺戟としてのそれより意味は通例狭い。

(2)2個の形容詞の間に意味の広狭関係のある場合は、程度の差はあるにしても、包入的関連で、両形容詞意味間に主従の関係が成立する。

したがって両形容詞は、等位接続詞andを間に挟み表現上は対等の位置に置かれていても、意味上は厳密に検討すると、両語彙の意味間に程度の差はあるにしても、広狭関係が存在すると、そこに依存関係の意味を構成する。すなわち「副詞+形容詞」的な主従の関係になり得ることの可成の数あることを示している。

註1)

①fine and..., nice and...の副詞的に用いられることのあるのは、*O.E.D.*の指摘するところである。

Connecting two adjectives of which the former logically stands in (or approaches to) an adverbial relation to the latter ; esp. in familiar language, and dialectally, after *nice*, *fine*.

と記され、1592、1604のShakespeareからの例が掲載されている。

②市河三喜『英文法研究』p.121~123にnice and...を中心にfine and...の例が掲げてある。

2) Pennsylvania State UniversityのPhilip Baldiは*American Speech* (Spring1983 Vol.58, No.1)の項目Miscellanyの中で、1頁余(p.81-82)にわたってgood andの用法にふれ、意味的には大体reallyと同義であると説いている。

3) A.Schmidt : *Shakespeare-Lexicon* p.39

4) H.Bradley : *The Making of English* p.112

河合 茂 『英文法概論』 p.516~17